# 青年学級「織姫彦星学校」の実践から

足利市織姫公民館　小　宮　一　夫

## 1．は　じ　め　に　～青年学級の必要性～

今日の社会構造の変化は，極めて急激であります。ことに，過去十数年に渡る日本の経済成長や技術革新の進展はめざましく，人々の物質的な生活は豊かになりました。しかし，その反面，いわゆる個性の喪失，人間疎外，地域連帯意識の減退など，好ましくない現象が起きていることも事実です。

そういった悪状況を打開するためにも，“生涯学習社会の実現”に向けて，社会教育の果たすべき役割は大きく，より一層の充実が必要と考えます。

特に，21世紀の中心的役割を担う青少年層への教育的考慮は重大であります。

青少年の徳性をかん養する上で，社会教育の果たすべき役割については，「青少年の徳性と社会教育」（昭和56年5月9日社会教育審議会答申）の中でも，「心身のひ弱さが目立ち，連帯の意識が低く，概して個としての確立が遅れているなど問題とすべき点がある」ことを指摘した上で，「今後に予想される社会状況の変化とそれに対処すべき課題を吟味しながら，青少年が将来個人として自立し，創造性に富み，社会連帯意識をもち，日本人としての自覚と国際感覚を身につけ，生きがいを求めて主体的に行動できるようになる必要がある」としています。

全国的に“青年団活動の衰退”“青年層の社会教育施設離れ”が叫ばれる中，平成4年度以降，織姫彦星学校の青年たちは，自主的な活動を活発に行なっております。

当論文において，その活発に行われている実践活動と，織姫公民館の取り組みについて紹介できればと思います。

## 2．青年学級「織姫彦星学校」

足利市織姫公民館では，毎年，主に18歳から30歳までの男女を対象に青年学級「織姫彦星学校」を開設しています。その名のとおり織姫・彦星伝説にちなんで，素敵な「友情」や「異性」との“出会い”があることを願っての学級名です。

### (1)　学習プログラムの見直し

#### ①　それまでの問題点

平成4年度以前の何年間かは，講義中心の学習プログラムで構成されていました。内容としては，結婚，交際等青年たちの関心があるものをテーマに盛り込んでいますが，講義中心ということもあり，受講生が20～25名はいるものの，実際の参加者は10名前後が多かったようです。数名の者は，講義終了間際にあらわれ，学習会後，深夜まで営業しているレストランに揃って出かけることだけを目的とした参加だったようです。

アウトドア体験学習

また，大きな問題点として，35歳前後？の，いわば常連（青年というには少々難しい）メンバーがいることで，新規で申し込んでくる20代前半の女性たちが，青年学級というイメージとは少々違った印象ととらえ，拒否反応？を起こし辞退してしまうという状況があったようです。

平成4年度から織姫彦星学校を担当することになり，これらの問題点を考慮しながら，何とか学習プログラムの魅力での参加者の拡大を目指し，全面的な見直しを行いました。

**② 年令制限の導入**

新規に公民館を利用する青年層を開拓する目的もあり，思い切って30歳までという年令制限を設けました。このことにより，数名の常連メンバーは参加できなくなってしまったことは事実です。

そのようなメンバーには，成人学級への参加を呼びかけました。有難いことに，今でも文化祭の時など，時折公民館に立ち寄ってくれています。

**③ 第一印象として“魅力”を感じる構成，「講義中心」から「体験学習」の形態へ**

織姫彦星学校の募集は，市広報紙への掲載，チラシによる案内，市内企業へのチラシ配布を中心に行っています。

第一印象として，青年層に興味を持たれるようなテーマを掲げ，講義中心ではない内容を幾つか盛り込む　ことを考えました。そこで「木造帆船でのクルージング体験」や「アウトドア・キャンプ」「バスケットボール」等，青年層受けするテーマを前半に設定し，これらの体験学習を通じて“仲間づくり”を促進する手法を取りました。

木造帆船シナーラ号でのクルージング体験

次に，これら青年層受けするテーマが目立つようにチラシをデザインし，配布しました。簡単に言えば，とりあえず公民館の敷居を跨いでほしいという気持ちでした。いくら仲間づくりを促進したくても，青年たちが集まらないことにはどうしようもありません。

こういった，学習プログラム前半の「遊びながら・楽しみながら」の仲間づくりを促進させる手法は，青年たちには受け入れやすく，自主的に活動する集団としての“まとまり”を形成するにも効果的だったようです。

**《平成4年度～6年度の活動データ》**

| 年度 | 修了者数（2／3以上の出席者） | 開　設　期　間 | 活動時間 | 参加者数 |
|---|---|---|---|---|
| 4年度 | 男：20名、女18名、計：38名 | 10月～3月：6カ月間 | 130時間 | 延　817名 |
| 5年度 | 男：12名、女12名、計：24名 | 7月～2月：8カ月間 | 125時間 | 延　592名 |
| 6年度 | 男：14名、女19名、計：33名 | 7月～3月：9カ月間 | 194時間 | 延 4,310名 |

## ⑵ 学習プログラムの内容

織姫彦星学校のプログラムは大きく分けて「国際交流」「世代間交流」「ディスカッション」「ボランティア」

「自主企画」の5つの柱から構成されています。

これらの5つの柱を関連付けながら「青年期に考えるべきことは何か」を考え，「学級生が自ら考え，企画し，実践していく」ことを目的として掲げています。そして，活動を通じて「仲間づくり」を深め，貴重な青春の思い出に残る「出会い」や「友情」を大切にしてほしいと位置付けます。

**① 学習プログラムの5つの柱**

ア　国際交流

当市の社会教育施策の掲げる現代的課題解決のための7項目（「環境」「健康」「家庭教育」「国際交流」「人権」「やさしいまちづくり」「ボランティア活動」）のうち，織姫公民館は「国際交流」を担当していることもあり，織姫彦星学校のカリキュラムの一つの柱として，国際交流を取り入れています。

平成4年度の受講生の発案により，「国際交流サッカー大会」を毎年継続して開催しています。

国際交流サッカー大会は，ある受講生から，職場に外国人の方々がいるものの，親しい交流の手段がなかなか見つからないという意見が出され，それがきっかけとなり，それでは一緒にサッカーをやってみてはどうか，ということで事業が始まりました。そして，織姫公民館開設の「外国人のための日本語講座」の受講生や国際交流協会，ペルー足利協会等のメンバーに呼びかけをして，参加者を募りました。

国際交流サッカー大会は，受講生の自主的な企画・運営により実施する設定をし，より一層の連帯感・仲間意識を促進するように導いています。目的が「交流」であることから，試合以外の部分にも思考をこらし，昼食の時間には，受講生手作りのけんちん汁やおにぎりを一緒に食べるという工夫をしました。

国際交流サッカー大会

頭ごなしに「国際交流」というテーマを掲げると「難しいこと」と考えがちな青年層に，サッカーという親しみやすいスポーツを通じて，一緒に昼食を取りながら交流を図るという手法は，効果が大きかったように思います。

受講生の中には，初めて外国の方と話をしたという者もあり，「日本語を上手に話すのでびっくりした」「とても楽しく話ができた」などの感想が数多く出されました。

イ　世代間交流

平成6年度からは，小学4年生から6年生までの児童を対象に，織姫公民館が開設している「子ども探検教室」の子どもたちも「国際交流サッカー大会」に加わり，世代や国籍を越えた交流を促進しています。子どもたちが加わることで，受講生は運営内容に，より詳細で綿密な対応を要求されるため，打合せや対応に工夫するという，集団としてのまとまりを促進する効果があったように思われます。

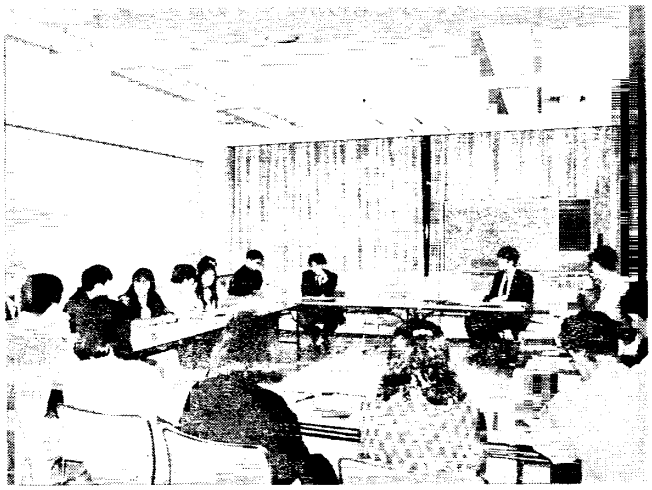
ウ　ディスカッション

学習会や事業は，可能な限り受講生の自主的な企画・運営を優先しているため，打合せ会を頻繁に開催します。

打合せ会では，目的だけを明確にし，目的実現のための手法は受講生のアイデアや工夫を優先します。時間的にはかなりの遠回りとなりますが，より「自主運営」という意識が高まるようです。

多くの打合せの時間を持つことで，連帯感が高まり，緊張感をほぐすこととなり，自分の意見を提案することに“慣れる”という状況が生み出されます。

また，「思いっきり討論会」と称し，受講生が決めたテーマによる討論会を実施しています。話合いのテーマは，「結婚・恋愛・同居」といった自分たちの近未来を想定したものを希望する傾向が強いようです。



思いっきり討論会

しかし，しかるべき場所・状況で自分の意見を発表するということには抵抗が大きく，専門家がアドバイザーとして出席すると，意見は容易には出てきません。思いっきり討論会の実施スタイルについても受講生に設定させると，アドバイザーなし，自分たちだけ，といった環境を設定するため，討論会の場の緊張感や，人前で自分の意見を述べる勇気といったものが半減されてしまいます。環境設定には苦慮しています。

エ　ボランティア

平成7年度から「ボランティア体験学習」を取り入れました。受講生の話合いにより，テーマを“高齢化”として焦点化し，市内の特別養護老人ホーム麗日荘のご協力を得て，体験学習を実施しました。

所長の講話をはじめ，施設見学，入居者と同じ食事の試食など，現実に表面化している“高齢化・老人ホームの実態”を目の当りにして，貴重な体験となったようです。

ボランティア体験学習

また，織姫公民館主催の「夜風の中の映画会」開催時（夏期・夜間2日間）の受付及び会場設営・撤去等のボランティアをプログラムに取り入れています。これは，後述する「自主企画」実施時のための事前学習的な位置付けであり，事業やイベントを実施する際の裏方を体験するものです。この体験により，事業の綿密な計画の必要性を感じ，達成・成功したときの充実感・感動を味わってもらうためのものです。

オ　自主企画

(I)　「自主企画」の考え方

織姫彦星学校の学習プログラムの中の一番の特徴は，学級生自らが作りあげる「自主企画」にあるといえます。

自主企画の考え方は，

○ただ単に，楽しいだけのイベント（事業）ではなく，現在の社会問題，環境，人権，国際理解

といったものがテーマの底辺にあること。

○青年学級開設の意味である「青年期に考えるべきこと」をメンバー全員が一緒になって考え，実施すること。

○自主企画そのものは，織姫彦星学校を通じて知り合った仲間たちが，自分たちだけの学習のみならず，なんらかの形で社会参加（若者の地域参加）し，その準備過程を通じ，さらにお互いの理解と仲間づくりを深めるためのもの。

であると位置づけています。

受講生に対し，公民館側からの基本的な指示としてはこの3点だけで，企画内容の工夫の仕方やアイデアについては，可能な限り受講生の意見を尊重します。

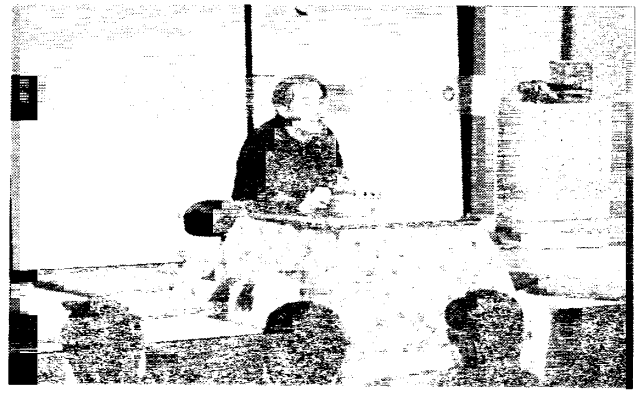
自主企画は毎年，全体の学習活動の後半に設定しています。その意味は，それまでの様々な学習活動を自主的に企画・運営・実施してきたノウハウや経験を生かした集大成の場として位置付けるためです。

(ii) 平成4年度からの「自主企画」の実践内容

**（平成4年度）『（映画）「阿賀に生きる」上映会＆佐藤真監督講演会』**

・新潟県，阿賀野川周辺に生きる人々が川とともに生きる姿をドキュメンタリー映画として記録。映画の根底には，水銀問題の未認定患者を巡る諸問題や過疎化，高齢化，農業の後継者不足といった様々な社会問題が映像の中に見え隠れする。

・自主企画として取り上げたのは，映画を通じて，こういった社会問題について多くの人々に関心を持ってほしいとの理由から。



「阿賀に生きる」佐藤真監督講演会

**（平成5年度）『アフリカのリズムで遊ぶ音楽会』**

・アフリカ音楽のミュージシャン「ウカララ」を迎えての音楽会。アフリカというと，日本のメディアを通じて紹介されるのは，「飢餓」「難民」「アパルトヘイト」など，暗い話題が多い。しかし，本当のアフリカは，そこに住む住民の大半が幸せに暮らし，豊かな生活を送っている。

・物質的には日本のほうが幸せではあるが，本当の意味での「豊かさ」とは何かを考える上で，音楽会を通してアフリカに関心を持ってもらうことにより，諸外国の状況，文化に対して関心を持ってもらおうというもの。

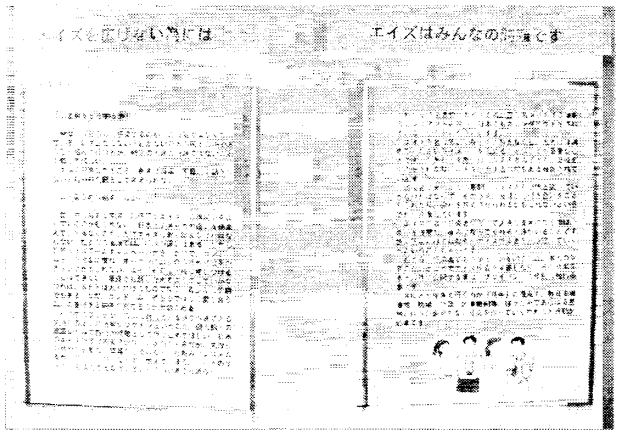
アフリカのリズムで遊ぶ音楽会

**（平成6年度）『愛したい恋したい，だからエイズを考えたい』**

・エイズを基本テーマとして取り上げ，筑波大学助教授・宗像恒次先生をお迎えしての講演会，南野陽子主演映画「私を抱いて，そしてキスして」の上映会及びエイズに関する調査・研究をパネル化しての展示（織姫公民館，コムファーストショッピングセンター内）を行った。あわせて，Act Against Aidsのキャンペー

ングッズ，参考図書の販売等を行い，売上金を日本ユニセフに寄付した。

・エイズに対する正しい知識と理解がないために，HIV感染者に対する差別が社会問題になっている。エイズを自分自身の問題とし捉えられるよう，もう一度考えてみることを目的に実施した。



エイズを研究テーマにしたパネル展示

以上平成4年度から6年度までの自主企画について紹介しました。

環境・人権などの社会問題や国際化について，自分と関わりをもった重要なことであると考える青少年がどれだけいるでしょうか。

彼らの創りあげてきた自主企画は，単なるイベントではなく，どうしたら自分たちの地域を世界に開かれた社会に発展させることができるのかという問題意識を持ちながら，社会問題に対する自らのあり方を根っこに据えての企画であるため，真剣に取り組み，輝いていたのだと思います。

## 3．集団としての“まとまり”“仲間づくり”の促進・必要性

### (1) リーダーの出現と担当者の役割分担

何回かの学習活動を通じて，少しずつ顔や名前を覚えてくると，集団としての“まとまり”が出てきます。そこには，場面場面のリーダーが登場してきます。会議の席で意見をまとめるリーダーや，親睦会の企画や取りまとめが得意なリーダーなど，個人個人の特性が，少しずつ見えてきます。

学級全体のリーダーとなる代表世話人の選出は，受講生が適当な時期を決め，選挙等により選考しますが，場面場面のリーダー的人材が，より活躍できるように支援する必要があります。自分の存在が仲間にとって必要であり，自分の活躍の場があるということが大切だからです。

リーダーが登場してからは，担当者は役割を変えなければなりません。それまでは，何から何までの調整にかかわり，受講生が頼りにするのは担当者が多く，いわば“兄貴”的な存在です。

しかし，集団として自主的に活動してもらうためには，リーダーや世話役がはっきりしてきた時点で，担当者は受講生との立場の違いを明確にする必要があります。

担当者の年令が近ければ近いほど，受講生は“友達”的感覚で接してきます。担当者として真剣に必要事項を述べる場面でも，緊張感やけじめはなくなってしまいます。そのため，その時期からは，やや“悪役”に転じなければなりません。それまでは，ある程度大目に見ていた学習室の整理整頓や，日誌・出席簿の管理等も，すべて受講生に責任を持たせます。このことで，担当者に依存してい部分が少しずつなくなり，受講生同志の“まとまり”をさらに促進することになります。

この段階までくると，自分たちだけでの親睦会も開催されるようになり，担当者不在な部分での人間関係が構築され，より積極的で自ら進んで何かをやろうとする集団（集団としての力）が形成されてきます。

### (2) 「小グループ化」傾向への対策

青年学級のみならず，集団が形成される場合，いくつかの小グループとしてまとまる傾向があります。学習プログラムの前半では，なるべくこういった傾向にならないように配慮しています。多くの人の，様々な価値観や考え方を理解し，協力しあって仲間づくりを促進するという，目的達成に大きな支障となるからで

す。各グループのリーダーに，青年学級の意味・目的を再度理解してもらい，全体としてまとまるよう導きます。

### (3) 「特技・持ち味」の発揮できる場の提供

自主的な事業や企画に取り組むようになると，それまでの共有時間の中で知りえた，お互いの能力を認め合うようになります。国際交流サッカー大会の場合など，昼食準備の際に，包丁を使うことが得意な者は調理を担当し，イラストを書くことが得意な者は，募集チラシを作成するといった具合です。

それまでは，見ず知らずだった同世代の仲間同志が，自己の特技や知識を生かし，いわば個人の「持ち味」といったものを発揮できるような場を提供することが必要だと思います。

## 4．今後の課題

### (1) 青年層の社会教育施設離れ

平成4年度以降の織姫彦星学校の活動について紹介してきましたが，総体的にみれば，青年層の社会教育施設離れは，当市も他市と同様，深刻と言わざるをえません。すでに学校教育を卒業した青年たちは，学校を卒業すると“学習”とは縁遠いと考えがちです。社会教育の分野として，織姫彦星学校だけでなく，青年層が社会教育施設に足を運ぼうと思うような，いかに魅力ある学習や事業，情報をさらに提供できるかが，大きな課題であると思います。

### (2) “ゆとり”のある“効果的”な学習プログラムの再検討

学習プログラム前半の，仲間づくりを促進する内容に始まり，一年間の活動の集大成としての自主企画の実施に至るまで，約9ヵ月の期間で実施しています。青年学級の目的や受講生の自主性の促進，大切な仲間としてのまとまりができるまでには，前述したような学習プログラムの設定は必要であると思います。

しかし，日程的にはかなりハードな面もあり，一つ一つの学習テーマについて，よりじっくりと考えるものとはなりません。受講生に対し，これらのテーマについて考えてもらうきっかけとしては必要なことですが，もう少しゆとりを持った，効果的な学習を再検討する必要があると思っています。

### (3) 「自主企画」の限界

企画の詳細について，基本的には公民館職員が同席しながら内容を検討し，受講生の様々なアイデアを実現することは，かなりの範囲で可能です。しかし，予算をはるかに越えるものや，あきらかに不可能な内容も意見としては出てきます。いくら受講生の発案とはいえ，ふさわしくない内容のものは許可できません。しかし，そういった意見も尊重して扱わないと，始めから意見を出しても無理と決めつけて，アイデアをつぶしてしまう恐れがあります。

自主企画の企画・運営をより効果的に進めるためには，いかに「自分たちの事業」という意識を高揚させるかにあります。自主的な部分が少なくなると，公民館に「やらされている」という意識をもってしまう危険性があります。自ら進んでやることと，やらされているのでは，取り組む姿勢が変わってしまいます。

前述したような自主企画の取り組みについては，テーマの視点，詳細部分，専門分野（より適切な講師の人選等）については，受講生だけでのアイデアには限界があります。広範囲まででのテーマの絞りこみはできるものの，より詳細部分については専門的知識を要します。受講生の要求を，具体的に実現性の高いものとして，最終的には公民館から提案せざるをえません。どこまで公民館から助言やアドバイスをすれば良いか，自主性を損なわないような提案の仕方はどうすれば良いか・・・。毎年，一番苦慮する点です。

### (4) 青年たちの自由に使えるスペースの確保

受講生は，学習会後，深夜営業のレストランを利用したり，休日に集まったりして自主活動を補足しています。しかし，そのような場では，消耗品や図書，学習用具や器材等が整っていません。また，準備してき

たパネルや看板といったものも，公民館に置いておかざるを得ません。より充実した活動を支援するためには，青年たちの自由に使えるスペースの確保も，今後必要となってくると思います。

### (5) 修了後のフォローアップ・学習の継続性

織姫彦星学校は，約9ヵ月間の学習を終えると修了となります。引き続き，次年度も参加するメンバーもいますが，7～8割のメンバーは，一年限りの参加となります。

学習の継続性を考えた場合，やっと仲間づくりができたメンバーが，解散してしまうことは，残念なことです。

しかし，公民館の敷居を跨いだことがきっかけとなり，ボランティア活動をはじめたり，公民館のフラワーアレンジや語学といったサークルに参加するなど，違った学習を始める者もいます。また，国際理解の学習効果として，青年の船への参加や個人的に海外旅行を経験し，熱っぽく感想を語ってくれる者も現れました。

織姫彦星学校を修了した後の，個人個人の学習継続への支援について，より効果的にどう対応するか，大きな課題が残っています。

## 5．おわりに

アメリカ社会の中では，子どもでも大人でもない青年層の存在が「ユースカルチャー」として認められています。より大きなアメリカのカルチャーの一部，すなわちサブカルチャーとして，全体の中に市民権を持ち，しっくりとはまり込んでいるということです。

アメリカの社会構造が，必ずしも良いとは言えませんが，青年期だからこそ，「考えるべきこと」「体験してほしいこと」があり，そのことを社会全体で支援する必要があると思います。

そういった意味で，今後社会教育行政のとるべき対応は重要であり，かつ，家庭や企業，学校，地域といった社会全体で，青年活動を支援する環境を整えていく必要があります。

地下資源の枯渇や食糧不足といった，直面化する世界規模での社会問題について，先進国といわれる国ほど，シリアスに考え，行動する必要があるのではないでしょうか。日本の青年たちには，“地球市民”的な立場で物事をとらえ，行動してほしいと願っています。

モノや情報や余暇の「豊かな社会」において，最も大切なことは「心の豊かさ」であると考えます。

社会教育担当職員として，青少年が「心の豊かさ」を感じて，より充実した人生をおくれるように，最大限の支援をすると共に，織姫彦星学校を経験した青年たちが，今後，地域活性化のリーダーとなり，好ましい家庭教育の実践者となって活躍してくれることを願い，まとめにかえたいと思います。

### 《参考文献》


・増田光吉著『アメリカの家族・日本の家族』NHKブックス

・福留　強著『グループ活動と青少年』学文社

・文部省内生涯学習・社会教育行政研究会編集『平成8年度版生涯学習・社会教育行政必携』

## 評

青年期は，第1在宅期から，在学期，在職期，そして，第2在宅期というライフステージからいうと，在職期に入ったばかりの時期であり，この面からの発達課題を学習課題にもつと同時に，また，一方，空間的なライフスペースから，地域の住民であり，家族の一員であり，職場の一員であり，学生生徒の一員であるといういくつかの集団または社会の一員であり，そこで生活することによる生活課題を学習課題として併せ持つことになり，多種多様な学習への要求課題が存在することになります。

この多様な学習要求に対して，社会教育の中核的存在である公民館が，青少年に対して学習プログラムを提供しています。本市の織姫公民館が開設している青年学級「織姫彦星学校」では，学習プログラムをより魅力的なものとするため，様々な工夫改善が試みられており，今後の学習プログラムの作成及び実施にあっての示唆を与えてくれています。

具体的には，下記の事項が特筆されます。

(1) プログラムの見直し

・問題点の摘出　・年齢制限による対象者の焦点化　・講義中心から体験学習への形態

(2) 学習プログラムの柱の充実

・他の学級講座との積極的な連携（相互互恵）

・「自主企画」における学級生の工夫やアイディアの尊重

(3) 運営面において

・仲間づくりとリーダーの養成・援助

・学級生一人一人の「特技や持ち味」の発揮できる場の設定・提供

また，「自主企画」の内容については，現在の社会での問題でしかも青年期において考える必要のあるテーマを選定し，異色の企画を実践されています。

この織姫公民館が実施しているプログラムのように，学習者の自発的な活動を援助するため，生涯学習の視点に立って様々な工夫改善を加え，社会教育活動の充実に努められていることは，生涯学習の推進に大きく寄与するものと確信しております。今後とも，学習プログラムの推進や開発におけるさらなる研究推進を期待しております。